月刊 まち・コミ 2010年2月号

● インフォメーション ●http://park15.wakwak.com/~m-comi/
3月21日（日）　御蔵学校を開催します。
テーマは「阪神・淡路大震災15年御蔵（まち・コミ）のまちづくりを振り返る（仮）」です。

● 今月の注目記事 ● P1～P3　1.17神戸、御蔵への思い～　まち・コミ来訪者からのメッセージ　～

1.17　神戸、　御蔵への思い

～ まち・コミ来訪者からのメッセージ ～

今年も1月17日は、大勢の方が御蔵へお越しくださり、ろうそく慰霊法要が執り行われました。また、来ることができない方からはメッセージが届くなど、阪神・淡路大震災への思いを感じる一日となりました。

当日、まち・コミの事務所へお越しくださった方を対象に、アンケートを実施。震災や御蔵との関わり、震災から15年を経た現在の思いをうかがいました。

今号では、そのアンケートを抜粋してお届けいたします。

▲1月17日御蔵北公園慰霊碑前には大勢の方が集まり、犠牲者を追悼しました。

●御蔵に対して

震災当時、曹洞宗兵庫県第一宗務所婦人会の一員として炊き出しなどに参加した
高田玲子さん

あれから15年、町並みは立派になっていますが、ここまでこぎ着けられた皆様のご苦労と、努力があってのことと思います。また、身内の方を亡くされた方々にとって忘れられない悲しみ、怒り、苦悩の日々を送られたことでしょう。亡くなられた方々のご冥福と、町内の皆様方のご健勝をお祈り致します。

10年以上前から御蔵を取材している
関西テレビ記者　豊島学恵さん

同僚の中にも震災を知らない世代が増え、複雑な思いがします。震災の教訓や課題を伝える立場のものが、まず一から勉強しないといけない状況で、報道の内容についてもどこまで課題などを掘り下げるのが一番視聴者に伝わるのか、悩むところです。御蔵の町の状況も変わり、自治会とまち･コミの関係など難しい点もありますが、人の社会の普通の問題として見つめるべき点ではないかと感じています。
※豊島さんが震災15年の御蔵を取材してくださっています。ご覧になりたい方は、まち･コミまでご連絡ください。

●被災地に対して

震災当時の日銀神戸支店長　遠藤勝裕さん

震災直後から公的な部門が行う復興の方向性に疑問。ハード偏重からソフトへの切り替えを主張してきたが、15年経った今、不幸にしてハード偏重の復興の問題点が露呈してきている。一方被災者の生活という立場に立ってみると、10年15年といった節目はない。毎日が犠牲者への思いと生活との闘いであることを忘れてはならない。そうした人達へのささやかな支えと今後への警鐘を鳴らす活動を続けていきたいと思う。16年目に入った今も震災直後も、その思いは変わらない。

震災直後ボランティアで神戸にやってきた、新潟の鈴木和博さん

46年前の新潟地震も風化しかかっていますが、15年を過ぎても風化させてはいかんなと思います。

神戸協同病院のボランティアで、患者さんの安否確認で御蔵にやってきた
医療ソーシャルワーカー　武山ゆかりさん

1月17日は街もにぎやかで元気が感じられますが･･･。空き店舗や空き地がやはり目につきます。産業も、戻っていないと聞く分野が多く、計画的な復興ではなく、競争経済原理に沿った復興に、やはりなったのだなあと思える街の様子です。でも「まちづくり」の経験はさまざまな形で全国に、海外にも学びや教訓を伝え、加えて「心のつながり」も、大きな波長で伝わったと思います。今日までの困難、今の困難もたくさん聞きますが、当時できた信頼は必ず、今を乗り越えていくと思います。

95年2月に御蔵に来て以来、定点観測をしている大阪工業大学教授　吉村英祐さん

私の中では15年は節目でも何でもありません。見かけ上は復興したように見えますが、私にはそうは思えません。神戸の教訓が十分は生かされず、同じような被害が繰り返されているのが歯がゆいです。学生には、私の思いをしっかり伝えていきます。

●ご遺族から

菅原通にお住まいの宮川勉さん

今もなお、母親、おじを亡くしたとは思えません。葬式を出来ていないこともあるからです。でも、生き残った者が供養しないといけないので、今後自分が生きている限り、努めたいです。

●世間の現状に照らして

東京のNGOスタッフとして、復興支援に関わった、
大阪経済大学客員教授　末村祐子さん

阿吽の呼吸にも似た状態で共助が成立する社会という意味では、残念ですが道半ば。でも、人間が生きる意味そのものともいえる「阿吽の呼吸の共助」は、体験した人間にしかその道を確かなものとして社会に根付かせていくことはできないとも思いますので、肩の力を抜いておおらかに前に進みたいですね。

朝日新聞論説委員　野呂雅之さん

被災地と被災者の自助努力による復興は明らかに限界があるが、政府は支える制度、仕組みをつくってはこなかった。民主党政権になって政治主導で災害対策ができるのか、注視していこうと考えています。

ひょうご・まち・くらし研究所所長
山口一史さん

地域や復興住宅の高齢化が進み、格差は拡大している。残念なことにそれを阻む隙がない。高齢化はやむを得ないとしても格差社会への流れを反転できないのが現状だ。ますます市民の提案力や戦略が必要となっている。まち・コミの虫の目と鳥の目を併せた活動に大いに期待したい。

●思い

震災から御蔵に関わった、
早稲田大学文学部教授　浦野正樹さん

関東における拠点になっていますが、なかなか充分な活動と、神戸と東京との連係の拠点になることができずにいます。神戸の地元での活動が今後どうなっていくか、充分考え見ていきたいと思います。

震災直後、被災地生活情報紙「デイリーニーズ」を発行した、
あらばき協同印刷代表　関根美子さん

もしこの街（新宿区大久保）に神戸並みの地震が起きたらどうなるのだろうと思った。街を歩いていると細い路地が多く消防車も入れないところもいっぱいある。神戸とよく似ている。そしてどんどん希薄になっている人とのつきあいも含めてさ。

95年からの御菅河内音頭盆踊り大会と、古民家移築集会所での文化講演会「百聞くらぶ」をプロデュース　橋本正樹さん

慰霊祭に参加させていただくと「生きる」という意味を改めて考えさせてくれます。そして、この「清々しい」いまの心を、もち続けたいと思います。

震災遺児の支援活動を続けてきた
あしなが育英会　八木俊介さん

自分の無力を感じますが、遺族の強さ、優しさを教えてもらいました。

★たくさんのメッセージありがとうございました。引き続き募集し、まち・コミブログにてご紹介させていただきますので、他の皆様もぜひ一言お寄せください。

「月刊まち・コミ」2009年1月号では、僧侶の方々の14年目の思いをうかがって特集記事にしました。インターネットでご覧いただけます。
http://machi-comi.homeip.net/m-comi/magazine/pdf/09-01.pdf

まち・コミnews

李浩麗さんが、台湾の古民家でコンサート

古民家移築を応援していただいている台湾人歌手の李浩麗さんが、歌の講座の生徒さん等21名と共に、台湾ツアーに行かれました。12月25日には、まち・コミによる台湾との交流事業の一環で建築中の古民家を訪問し、クリスマスコンサートも行われました。

「2004年から今日までのこの古民家プロジェクトの歩みが如何に大変だったか、それを傍で見てきた人間としても、この25日をとても楽しみにしていました。バラバラに解体された材木が船に乗せられ、そして海を渡り、別の国で再びその雄姿を現すまで、どれだけの人達の汗と涙がここに流されたのかを知っているだけに、素晴らしい姿で堂々と淡水を見下ろせる地に建っている古民家を見た時は本当に感無量でした。是非淡水の地でも日本で過ごした年月と同じぐらい頑張って欲しい」と李浩麗さん。

※李浩麗さんのコメント全文や古民家の写真と詳細は、「まち・コミブログ」で紹介しています。

大地のつぶやき

〜 竣工間近の一滴水記念館 〜

台湾に渡った水上勉さん縁の古民家が淡水鎮の和平記念公園の一角に「一滴水記念館」として出来上がった。

福井県おおい町で解体して五年余り、仮置していた氷上町木材センターの倉庫からワンハイのコンテナに積み込み神戸を出港してから四年、そして台湾九二一地震から十年を経ていた。この間台湾の畏友邱明民さん始め多くの台湾の友人たちとの交流は希薄になるどころか、却って広がり、深まりを持つ様になりました。

我々日本側もその間に全く知らなかった太平洋戦争末期に神奈川県の高座海軍工廠で十三才より二十才迄の台湾本島人少年八千人余りが雷電という高性能の戦闘機を造っていたことを。リーダー役の中卒者に大半は小学校を卒業したばかりの少年で、日本で働きながら勉強すると中学校卒業や専門学校卒業の資格を得られるとの条件に魅せられ厳しい試験を通って、夢を抱いて来た人たちです。敗戦とともに約束を反故にされ、中には病に斃れ、空襲の犠牲になり、故国に帰れなかった人もいた。この五年がなければ高座海軍工廠を知ることはおろか、当時の教官である日本の一技手が私費を投じて善得寺に建立された慰霊碑に参ることもなかったであろう。私の中で台湾は深耕している。

移築作業に当たった日本の大工や左官、それに学生ボランティアと台湾の職人さん、学生ボランティアの交流も素晴らしいものでした。一つの目標に向かって、毎日汗を流し合い、指導する方も指導を受ける方も真剣そのもので、身振り手振りで何時の間にか心が通い合い意思の疎通も出来る様になってくる。時に叱られ、時に「よくやった」と褒められ、自分が役立っている、自分の存在を喜んでもらっていると実感出来る喜び。また指導者も質問されることによって慕われていること、絆を感じ、信頼の根拠になり、達成感はお互いに無上の喜びとなっている。

株式会社兵庫商会　田中保三

みくらエッセイ

「15年目、朝の祈りからの出発」

金原 雅彦

震災から15年を迎える17日を目前にして、久々に御蔵の地を訪れました。しかし思っていたほどの懐かしさはありません。2、3年は会ってなかったはずの面々が普通に迎えてくれたことや、街の風景の変化がそれほど目立たなかったことが、その経年を忘れさせたのでしょうか。

私と御蔵との関わりは、ただの偶然のきまぐれから始まります。震災後に参加したピースボート(PB)のボランティア拠点がたまたま長田でした。そのPBが本部のプレハブ建設地を探していると、田中社長が御蔵へと招いて下さります。こうした縁に導かれるまま、以降も事あるごとに御蔵に通うことになったのです。PBがそれまでの公園テント村から御蔵のプレハブ本部に拠点を移し、活動をし始めようとした朝、皆で焦土の中に集って追悼の祈りを捧げたことをよく覚えています。その場所は現在、御蔵北公園となりました。

あれから15年目の17日早朝、この公園での慰霊法要には多くの、そして様々な人が集っていました。地元住民の方々、戻れなかった元住民、復興住宅に入居した新住民、そしてボランティアや学生、専門家たち。まさにこの地の多様な交流や活動歴を凝縮したような「場」でした。この多様性が全国的な評価を得た活動の成果でもあったわけですが、逆にこれが数年前から表面化してきた地域内での住民の「すれ違い」を生み出した要因の一つでもあったとすれば、この多様性も皮肉なものに映ります。

今回の来神で最も感じたのは、思っていたよりもその「すれ違い」の溝が深かったことでした。この慰霊の場に漂っていた冷厳な追悼の空気に交わり漂う、ピリピリとした異様な空気感。正直その深さの中に浸り重い気持ちになりました。しかし外の人間としてはそれをただ傍観することしかできません。だがそうも言ってられず、その影響は御蔵だけにとどまる話ではないようでした。

今回ほかの地区を訪れた時に御蔵から来たと話すと、いろいろな話をされました。御蔵は今「結果論」的に言えば、壊れてしまっている状態だと。結果その地区の人が役所に行っても「お宅の地区は大丈夫？」と嫌みを言われると言います。これまでの御蔵の多様な活動に対する全国的な評価と反比例するような同じ被災地内からの冷静な視線は、厳しいながらも同じ境遇の者としての行く末を案じているものでした。

ただこの「結果論」とは、2010年時点の結果です。例えば数年前までの結果論では、ここは先進的な成功例ではなかったでしょうか。私がこの街を見守っていこうという想いは、偶然の縁で導かれた焦土の中での追悼の祈りから出発しました。15年目の朝に集った人たちも、それぞれ立ち位置は違えど「この地」で追悼したいという想いは同じでしょう。その意味を改めて顧みつつも、まちづくりの結果はこれからだとも思っています。それを見届けるべく、これからもこの縁を大切にしたいと考えています。

○プロフィール○
KINBARA, Masahiko　1973年北九州生まれ、埼玉育ち。1995年2月に初来神。以降御蔵には生活情報紙制作や祭事ボランティアとして通う。ライフワークとして被災地定点観測撮影、Webサイト「震災発(http://kobe117.ciao.jp/)」主宰。

まち･コミ活動報告　1/1～1/31

1/7　読売新聞による
　　古民家移築事業取材
1/7　中国語講座（第23回）
1/8　東京大学社会科学研究所
　　佐藤氏ヒアリング調査同行
1/8・9　専修大生
　　古民家調査のため来訪
1/9　震災学習下見の受入
1/10　こうべあいウォーク
　　参加者へ豚汁提供
1/10　近畿大学
　　小島孜教授と院生来訪
1/13　まち・コミ打ち合わせ
1/16　ニューオリンズから来訪者
1/16　山古志サテライトメンバー
　　と山古志住民来訪
1/17　ろうそく慰霊法要
1/19　中国語講座（第25回）
1/24　WEBまち・コミ会議
1/31　宮崎県主催
　　「宮崎県防災士養成研修
　　(専門コース)」にて講演
　　(田中)

ご支援、ありがとうございます。　12/25～1/27

●賛助会員(新規･継続)●
鎌田啓通(徳島県)　高宮城幸雄(兵庫県)　中林一樹(神奈川県)　西堀喜久夫(福岡県)　高森香都子(兵庫県)
佐藤美姿(埼玉県)　斉藤賢次(兵庫県)　読売新聞大阪本社神戸総局(兵庫県)　酒井勇(大阪府)
岸岡孝昭(兵庫県)　池田浩敬(静岡県)　中林浩(兵庫県)　青池憲司(千葉県)　齊田哲平(東京都)
福岡峻治(東京都)　福留邦洋(新潟県)　鳴海邦碩(大阪府)　石倉泰三(兵庫県)　浜崎としずみ(兵庫県)
西浦英子(兵庫県)　新川泰道(秋田県)　青田良介(兵庫県)　荒木正昭(熊本県)　原辺智子(東京都)
高田幸治(岡山県)　寿松木宏毅(秋田県)　浅野宏(神奈川県)　久保田千春(兵庫県)　山田俊治(兵庫県)
矢野正広(栃木県)　島田誠(兵庫県)　橋本光穂(兵庫県)
●寄付●　三宅展子(兵庫県)
●協力●社団法人シャンティ国際ボランティア会(東京都)　株式会社兵庫商会(兵庫県)　【順不同･敬称略】

新規賛助会員募集＆更新のお願い

まち･コミでは、さらに活発に活動を行うため、賛助会員を募集し、金銭面でのご支援をいただいています。会費は、事業推進のために活用させていただきます。賛助会員のみなさまには、会員特典をご用意しておりますので、ぜひ賛助会員への登録をお願いいたします。

また、賛助会員は１年更新とさせていただいています。現在賛助会員の方も時期がきましたら、更新をお願いいたします。(期限は、「月刊まち・コミ」郵送時の封筒の、宛名の下に記載していますので、ご確認ください。)

会員特典

◆本誌「月刊まち・コミ」の送付。
◆まち・コミュニケーションに関する、Ｅメールでの情報送付、WEBの特別ページの参照

よろしくおねがいいたします。

■編集後記　今年のろうそく慰霊法要も大勢の方々がお越し下さいました。震災の体験を伝えていくことの大切を改めて感じた１日でした。(戸)

年会費
個人・法人　年間５０００円
学生　　年間３０００円
郵便振替口座番号
００９５０－３－４２７８８
口座名称
「まち・コミュニケーション事務局」

2010年2月1日発行
編集／発行　まち･コミュニケーション
定価　１００円
御蔵事務所　〒653-0014
神戸市長田区御蔵通5-5
TEL　078-578-1100／FAX　078-576-7961
東京事務所　〒162-0052
東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学文学部浦野研究室内
神奈川事務所　〒214-8580
神奈川県川崎市多摩区東三田２丁目1-1
専修大学文学部大矢根研究室内
e-mail　m-comi@bj.wakwak.com
URL　http://park15.wakwak.com/~m-comi/